
栗ヶ崎高校の一つの日常

色梨 新人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

栗ヶ崎高校の一日の日常

【Nコード】

N2859L

【作者名】

色梨 新人

【あらすじ】

朝も早うから部室で寛ぐ男子生徒の下へ女子生徒が怒鳴りこんでくる。

何やらえらい大変な事件が起きたらしいが？

無駄なプロローグ（前書き）

この文章は、元々ボイスドラマ用に作ったものです。

無駄なプロローグ

？ナポレオンは夜三時間しか寝なかったそうだ。兵士やらなんやらが寝てからも作戦を練り兵站を計算し書類にサインをしていたとか。その活躍は兵士の士気にも関係していたらしい。しかし実際は、昼間は部下の目を盗んでは昼寝をするし、休日にいたっては起きている事自体が珍しかったそうだ。それは単なるスイミンショウガイなのでは？

「んがあゝ」

俺は埒もない事を考えながら気合いの入った伸びをする。

――

？朝の学校は気持ちがいい。前日の空気が新しい空気と入れ替わりピンと張っていて、朝の香りがする。人が少ないこともあって聞こえるのは朝連に精を出す部活生ぐらいだ。

？俺は静かな廊下を抜け部屋の前に立つ。『部室使用願い』とかいう書類を適当に書きなぐった所、簡単に判子が押され手に入った部屋だ。他の部屋よりも広く、最上階の角という好立地にもかかわらず余っていたらしい。

？というのもこの部屋には使用条件があったためである。それはここ数十年まったく使用していなかったこの部屋を自分達で掃除すること。

？安物買い銭失い……この諺は今回の件にも当てはまるのだろうか。結局、部室を手に入れての最初の活動はホコリを払いカビを削り落とし、ゴミを出す……業者の引っ越しをほつふつとさせる有様であった。

？深呼吸をしてから部室のドアのノブをひねった。

？机やら椅子を入れた上で小学生あたりなら運動会が出来そうだ…
…言いすぎた。せいぜいラジオ体操くらいか。机の脇をラジオ体操の音楽を脳内プレイヤーから奏でながら抜けていく。壁一面に設えられた本棚には前使用者が置いて行った物で本はタイトルから物理学、歴史書、経済学、地理的な本や英語の本？？英語以外の外国語も混じっているようだが俺には何語かわからなかった？？など多岐に渡っている。前使用者がどういいう活動を行っていたのか俺にはさっぱりわからなかった。本自体も中身を確認したが、大量の押し花作成以外の使い道は思い付いていない。

？そして異様に年季の入った机に着席する。部室というより社長室にこそ相応しいその机もまたこの部屋の備品であった。あまりにも汚れていたが一月磨きに磨きあげた結果アンティークの様な雰囲気醸し出す一品となった。俺は一人悦に入りニマニマと笑みを浮かべる。

「先輩！先輩！」

？俺は突然の乱入者に目を丸くした。始業のチャイムにはまだ早い。そんな時間に自分以外の人間がこの部室に現れるのは珍しいからだ。

無駄なプロローグ（後書き）

意味不明を目指したのは間違いありませんが、
その主な理由は私の力量不足で間違いございません。

無謀な大事件（前書き）

朝も早うから部室で寛ぐ男子生徒の下へ女子生徒が怒鳴りこんでくる。

何やらえらい大変な事件が起きたらしいが？

無謀な大事件

？「ナポレオンがウンヌンカンヌンとか、朝の空気はアッハンウツ
フンとか一人で気持ち悪いですよ・・・先輩・・・」
走り込んで来た制服の少女は俺を見るなりとてつも無く失礼な言葉
を発する。

「き、気持ち悪いとか失礼な！？というか、人のセンチメンタルな
モノローグを読んじやイケマセン!？」

？女の顔には、困惑ーというか、可哀想な物と汚い物を足して小
麦粉をぶち込んだ物を見る表情ーが浮かんでいる。

「で、突然何だ??？」

？俺は、姿勢を正すと騒がしく闖入してきた理由を問う。

「・・・第一話丸々使って恥ずかしいモノローグって・・・」

「いや、いいじゃん、その話し。完全に終わったタイミングじゃん。
もうその話し止めよ??？」

「そうですね。先輩が気持ち悪いなんていつもの事ですしね?」

「お前がしつこかったんじゃないか・・・」

？視界がぼやけるのを感じながら抗議する。

「そんな事より大変なんです。助けて下さい」

「さつきからうるさいなあ。助けて欲しいって、何が?」

？俺はワザとらしく咳き込む。煩わしいという意味を込めたが相手
には余り効かない事は長年ーと言っても数ヶ月ーの付き合いで
予想はついている。当然のように無視して話しは進められる。

「ネギが!??」

「ネギが??？」

「頭に!??」

「頭に??？」

「生えてきたんです!??」

「生えてきた??何が!??」

?俺は、きちんと聞こえたにも関わらず再度聞き返す。

「だからネギですって!?!」

?分かってる。判ってる。完全に解ってるから聞き返したんだ。

?見ると確かに頭のつむじ辺りからネギが生えている。髪型もいつものツインテールからポニーテールに変わっているのは、ネギを隠す為だろうか。はっきり言ってほとんど隠れてはいないが。

「どうしてだよ??」

「知りませんよ?」

?私だつて知りたいと顔を覆う。俺は頭を抱える。例え俺がブラックジャックだったとしても同じ光景が広がっているだろう。

「朝起きたら生えてたんです」

?泣き声のような呟きに、俺がキリコだったら安楽死確定だったな。という感想しか出てこない。

無害な害虫

「何が詰まってるれば頭からネギが生えてくるんだらうな」

「俺は、ネギの生えた世にも奇妙な頭頂部をまじまじと見つめる。」

「ポニーテールか何かの代わりかなんかかなあ」

「なに訳の分かんない事言ってるんですか!? 他人事だと思ってませんか!??」

「まあ・・・なあ・・・とりあえず、あれだなあ。？抜いてみるか」

「完全に他人事であり、凶星だったので思わず言葉に詰りかけたがなんとか言葉を繋げて誤魔化す。」

「え?? 抜くんですか?? い、痛くないですか??」

「いやあ、こんな経験したことないからなあ」

「そんな〜痛いのは嫌です〜」

「潤んだ瞳でこちらを上目遣いで見やる女性の姿にグッとこない男はいないだろう。実際、俺は思わず唾を飲み込んだ。だが、俺が唾を飲み込んだ理由はそんな下世話な理由ではなく、もう一段階上にある下世話な理由だ。」

「なんていうかさ・・・何かがぬるりについてきたらやだね」

「何かつて・・・何がですか??」

「いや・・・まあ、味噌的なの??」

「味噌?? と、頭にハテナマークをいっばい浮かべながらネギをさすると突然大声をあげる。」

「味噌つてもしかして脳味噌の事ですか!??」

「H A H A H A! ? ダイジョーブ!? 脳味噌に痛点八ありませえん」
「俺は何故か片言になりながら、問題のネギに手をかける。」

「いや、ちょ、ちよつと待って下さい! ? ストップ! ? ストップ! ?」

「慌てて俺の手をはたくので、諭すように声をかける。」

「女は度胸! ? なんでも試してみるもんだぜ」

「何適当な事言ってるんですか!？」

「最高の笑顔にサムアップまでつけたのだが上手く騙せなかったよ
うだ。」

「何なんですか!？人が一所懸命に悩んでるのに!？」

「そういうと顔を伏せてしまった。さすがにやりすぎたか・俺は
反省する。」

「いや、すまん。あまりな展開に少しオーバーフローを起こしてし
まったんだ」

「俺は、頭を掻きながら言葉を続ける。」

「その何だ。やはり頭にネギが生えてるとあれだよな・・・」

「どれですか??？」

「えっ??？ああ、あれだよ」

「適当な言葉が出てこない。こいつは朝起きたらネギが生えていた
のだ。驚いただろうし、絶望しただろう。しかし、俺にはその時の
こいつの気持ちの万分の一も理解出来ないだろう・それでも、そ
れでも、俺ならどうしただろう、どうして欲しいんだろう・
?そこまで考えて俺はある一つの疑問にぶち当たった。」

「おい、お前何で学校来たんだ??？」

「へっ??？」

「次に答えに詰まるのは相手の番だった。」

「いや、だって普通は、救急車なり呼んで病院行かないか??？」

「い、いや」だって・・・」

「顔を伏せなおすと指をいじいじします。」

「その人に見られるのってやっぱり恥ずかしいじゃないですか
そういうと、恥ずかしそうに顔をまたあげる。」

「お前の脳味噌の出来が一番恥ずかしいわ!？」

「俺もまた違う意味で顔を赤くした。」

無傷の重病

「チッ」

？俺は、小さく舌を打つ。さきほどから頭にネギを生やした女が、こちらを見上げ、溜息については顔を伏せる。という動作を五分以上続けているからだ。こちらはとうの昔に三度目の仏の顔は使い果たしている。次はキリスト様を使うべきか、いや、八百万の神々なら2400万回いける訳で・・・などと考えていると目の前のネギが大きく動く。

「もういいんです・・・私、このままネギ頭で生きていきます・・・」
？俺は、喋る度にピコピコ動くネギを見つめる。

「どうした？？とうとう脳味噌に根がまわったか？？」

「それで、日本のネギの自給率を・・・」
？本当に脳髓まで根がまわったようだ。

「落ち着け！？お前一人の立った一本のネギで変わるもんじゃねえ！？」

？肩を捕まえて、ガクガクと揺らす。

「離して下さい。？先輩にはわからないですよ！？葱を生やして生きて行く女の気持ちか！？」

「まあ、一マイクロリットルたりともわからんのは確かだ」

？俺は、顎に手をかけ返答する。

「やっぱり他人事なんだ！？」

？俺を睨みつける瞳に何も答える事はできない。その通り。他人事だ。

「先輩にも何か生えればいいんだ！？腐ったタマネギとか！？」

「腐ったタマネギってなんだよ！？生えてたまるか！？」

「んじゃ、ロードローラー」

「どっちが本体かわからなくなるわ！？」

無償の代金

「なんだ、その・・・思い当たる節とかないのか？」

「俺は、時計を見る。学校についてから20分位経っている。」

「うーん、思い当たる点って訳じゃないんですけど、昨日こんなものが」

「？そういうと一枚の紙を手渡された。何の気無しに目を通す。」

「えっと、名前は雪といます。私の蓄えが少なく育てる事が出来なくなりました。どうか育てて下さい・・・って、何だ？ こりゃ」

「家の前にあつたんです」

「俺は、眉をひそめる。」

「おいおい、捨て子か？」

「捨て子なら先輩何かに相談しませんよ」

「親身・・・な振りを取ったにも関わらず、やれやれ、と言った態度を取られる。」

「相談されても困るが「なんかに」なんて言われるとカチンとくるな。んじゃ、犬？」

「違います」

「ネコ？」

「おいしい！」

「膝を叩いて反応された。」

「おしいってなんだよ？クイズとかするつもりさらさらねえんだよ！」

「いや、つい・・・てへっ」

「うざいな〜で、何だよ、ネコがおいしいって。何が捨てられてたんだよ」

「ネギ」

「ね、ネギ！ おしいってどういうこと！？」

「？予想外の解答に頭がついていかない。」

「いや、葱と猫で字面が・・・」

「「ね」から始まるって所か？ 漢字で一文字ひらがな二文字って所か？ そんなことはどうでもいい！ 雪ってなんだよ」

「ネギの名前ですよ」

「この女からすれば当然なのだろう・・・胸を張って答える。？」

「んなわきゃあるか！？ そうだったとしても絶対違う」

「でも、葱と紙が一緒にあったんですよ？ 絶対関連有りですよ！」

「掴み掛からんばかりの勢いで食らいついてくる。」

「いや、ほら、あれだ・・・」

「俺は自分の知っている常識に当てはめようと脳味噌をフル回転させる。」

「例えば・・・そうだ！ 猫の餌として葱置いてたとか！」

「猫に葱食わせたら死にますよ」

「冷静にツツコミが入る。」

「んじゃ、子供？」

「生まれて直ぐ捨てるなんて鬼畜なのにその上葱食わそうってどんな教育受けた親ですか！」

「いいツツコミだ」

俺は親指を立てる。現在の俺には冷静な判断は不可能なようだ。

無意の存在意義

「うーん、んじゃ・・・」

？俺は、脳内の常識と分類されたフォルダを検索する。残念ながら今回の件と同伴または類似件は引つかからない。

「諦めて信じて下さいよお」

？諦めるとか信じるとかの問題じゃないんだよな・・・独り言ちる。

「信じる信じないは別としてだなあ、その葱どうしたんだ？」

？組んだ腕を解いて顎に添える。

「え？ 食べましたよ？」

？それがどうした？ といわんばかりの態度でこたえる。？

「え？ 食べたの？ 食べちゃったの？」

？俺の中で一瞬時が止まる。

「お前あほなの？ ってかあほだろ！ 普通落ちてたネギくうか！」

？俺は口から飛沫を飛ばす。

「やだなあ、先輩。なんか勘違いしてませんか？」

？顔にかかった飛沫を拭くとニコリと笑う。

「落ちてたネギをそのまま食べる訳ないじゃないですか」

「まあ、そりゃそうだよな・・・」

「鶏肉と一緒にやいて食べましたよ。ネギ塩・・・美味しかったなあ」
？涎を拭う仕草を見ながら俺は非常識フォルダにこの女をファイリ
ングした。

無実な有罪判決

「はあ、これからどうやって生きていけばいいんだろう」

「どうやら本気で悩んでいるようだ。ならば本気でこたえねばな。

「病院行けよ」

「いやですって、恥ずかしい」

「えっへん、と胸を張る。

「大体男なら俺が何とかしてやるとか言わないんですか？」

「さつき抜いてやるって言ったじゃねえか。っていうかさ、そろそ

ろ・・・」

「そう言った所で、ちようど始業を伝えるチャイムが鳴る。

「授業が・・・」

「始まるな」

「寂しそうな顔をよそに俺は席を立つ。

「ちよっ！ どこに行くんですか！」

「ん？ 真面目な学生だぜ？ 授業に決まってるじゃないか」

「俺は、ニヤリと笑う。

「だから親指立てるな！ 私一人でどうすればいいんですか！」

「いや、知らんよ。授業出れば？」

「嫌ですって！ いくら元気に挨拶したって私の人間性を疑われま

す！」

「疑われるのは人間性じゃない。人間かどうかだ。

「疑われれば晴らせばいいじゃないか！ 教師と学生はそうやって

絆を深めて行くもんだ！」

「そんな歪な絆、気持ち悪くて深めたくありません！」

「んじゃ、病院に行けえ！」

「俺は、廊下を指差す。

「やだやだあ！ 葱生やして病院行ってクスクス笑われたくないい

！」

? そついうと掴みかかってくる。

「ここに来た時点でもう遅いわ! とりあえず、離せ・・ 離さん
かあ・・ 離せえ! とつりゃあ!」

? 自分でも惚れ惚れする美事な上手投げが決まった。

「いたたたたあ・・ 酷いですよ! 何も投げなくても
? 腰をさすりながら起き上がる。

「すまん! 大丈夫か? っておい!」

「はい?」

「葱が!」

「葱が?」

「頭!」

「頭?」

「取れた!」?

「取れた? あゝ頭に葱がない!」

? 頭頂部をさすりさすりとする。満面の笑顔だ。

「いやゝ良かったなゝ」

? 俺も満面の笑みで手を差し出す。しかし、その手はなかなか手は
握り返されない。代わりに不安気な声が返ってくる。

「あのお、血、出てませんか?」

? 差し出された手はわずかに赤い。

「いや、まあ・・ 縫うほどじゃないかな・・」

? 今日の一限は出席に厳しい先生だという事実が非常に痛かった。

無実な有罪判決（後書き）

これで終わりです。

登場人物の名前がないとなかなか書き辛いですね。やっぱ。次回書く時はやまなしおちなしいみなしはやめよう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2859/>

栗ヶ崎高校の一つの日常

2010年10月11日23時10分発行